

産科医不足対応プログラムがスタート

助産師や、産科で働く看護師の技術向上を図る「ステップアッププログラム」が14日、岡山市鹿田町の岡山大医学部で始まった。全国的な産科医不足に対応できる人

材を育てるのが狙い。3月6日まで全4回行い、初日は、通常、医師が担う超音波検査で胎児の状態をチェックする技能を学んだ。

岡山大学院保健学研究科



モデル人形を使って、熱心に超音波検査に取り組む助産師ら

県内外の助産、看護師10人

超音波検査に挑戦

県内外から十人が参加。同大学院保健学研究科の中塚幹也教授(母子看護学)が機器の扱い

臓が動いているかを確認した。

参加者は「画面ばかりに集中せず、母体のおなかも見て」など注意を

受けながら、慣れない手つきで機器を操作。このほか、3D(三次元)超音波検査で胎児の表情を見たり、参加者同士で実際の子宮の断面も観察した。

参加した倉敷成人病センター(倉敷市白楽町)の助産師山下千絵さん(三)は「超音波検査は、いつも医師が行っているのを見るだけ。技術を習得すれば医師の負担も減らせる」と話していた。

お産をめぐる現場では、正常分娩は助産師、リスクが高いケースを産科医が受け持つという役割分担の動きが現れている。産科医不足もあって助産師の一層の活躍が期

待され、助産師らの医療知識、技術向上のため同研究科がプログラムを企画した。プログラムは、二〇〇七年度の文部科学省「再チャレンジ支援総合プログラム」に採択されている。今後は不妊や不育症の女性への精神的ケアや育児ストレス解消法などについて学ぶ。

(水嶋佑香)